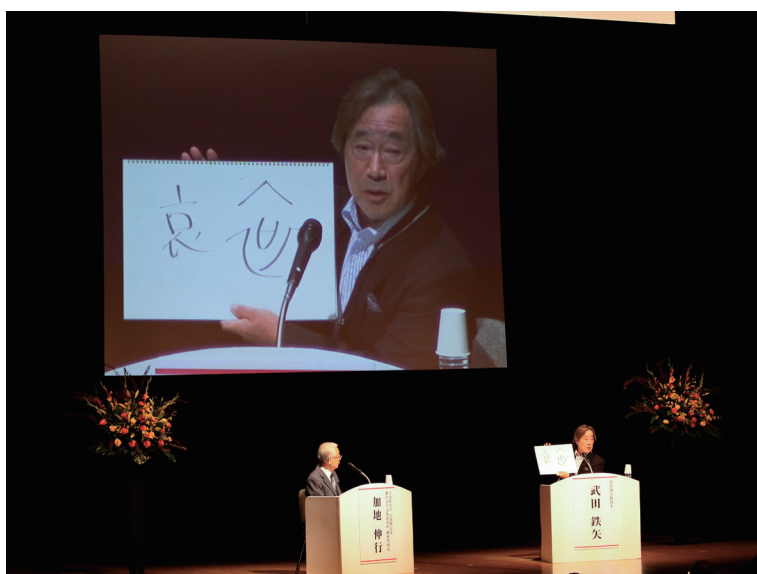


白川研究 所 便 り



オール立命館校友会大会2014 in 岡山・立命館アカデミック企画『白川静と漢字教育』（2014年10月25日）の様子

目 次 ◆ i n d e x

ご挨拶	2
台湾での「白川文字学シンポジウム」	2
久保 裕之	2
「漢字をきわめ、教える力へ」漢字教育士資格認定者の活躍	3
久保 裕之	3
再度、中国での学外研究	4
芳村 弘道	4
福井ライフ・アカデミー漢字文化講座「白川文字学を学ぼう」の講演	7
津崎 幸博	7
附属校教員による「白川式漢字学習法」開発ワーキングが発足	8
後藤 文男	8
漢字学研究会の紹介と活動報告	9
佐藤 信弥	9
「初期漢字研究会」の活動報告	10
高島 敏夫	10
立命館いばらき講座	11
高島 敏夫	11
二〇一三年度 文化事業活動報告	12
久保 裕之	12
立命館アカデミック企画「白川静と漢字教育」	15
久保 裕之	15

第9号

発行

14.8.00

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-4666-3470
Mail toyomoto@st.ritsumei.ac.jp
URL <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sic/index.html>

ご挨拶

所長 杉橋 隆夫



二〇一四年正月に所長を拝命しました。私はこれまで日本中世史を専攻し、古文書学を研究してきましたので、白川静先生の授業を直接受講した経験はないものの、学内外で催された講筵に列し、各種著作から大いに感銘を覚えました。歴代所長のように、学園全体の重職にあつてこれを兼務するわけでも、白川文字学に直接する深い学殖を有するものでもありませんが、本職への就任を名誉と心得、職責を全うすべく力を尽くす覚悟です。

当研究所の業務は、白川博士の研究業績を基に、東洋文字文化研究の振興および啓蒙・普及をはかることにあります。私の専門分野である日本古文書学は、白川学の神髄からは、一見離れたところにあるように感じられますが、そもそも白川先生の研究の出発点の一つが『万葉集』であつたように、広く東洋の文字文化を包括的に追究する姿勢は、当初から備わった重要な構成要素であつたといえます。また白川名誉教授が想定し、かつて厳然として存在した「東洋」——漢字と漢字文化を共有しながら、各民族が独自の文化を発展させた社会——の考察は、現今のアジア地域を巡る情勢に照らしても、ますますその意義を増してきていると考えます。

本研究所は、甲骨・金文をはじめ漢字研究の深化と普及をいっそう推進するとともに、学内外の研究機関・教育システムとの連携を強め、新しい今日的課題にも対応して行きたいと思ひます。

(立命館大学文学部特任教授)

「漢字をきわめ、教える力へ」

漢字教育士資格認定者の活躍

文化事業担当 久保 裕之

「好きな漢字を学ぶ。体系的に深く学ぶ。」漢字教育士は、漢字の歴史や文化的背景、成り立ちなどを教えることができる方に与えられる資格です。これまでの漢字学習の常道であつた「とにかく書いて覚えよ」とは一線を画し、学習者の「なぜ」に体系的に答えられる「知識の引き出し」を多くもつ人を育てたいという白川研の思いを具現化したものです。これは白川先生の思いでもありました。

漢字教育士資格認定の方式は、①大学での指定学科の修了、②漢字教育士資格認定ウェブ講座の修了の二つです。特にウェブ講座の受講はどなたでも受講でき、時間的・空間的制約を受けることなく受講できるのでお勧めです。ウェブ講座は全四科目・八〇講座から成り、資格認定は全課程の修了が要件となりますが、一科目ずつ学習することも可能です。

放送大学大阪学習センターでは面接授業「漢字学」が毎学期開講されており、毎回定員超過の人気科目となっています。また資格認定ウェブ講座は株式会社Z会により運営されており、白川研ではZ会と共に全国でプロモーション活動を始めます。その一環として各地のマスコミとの協働による「漢字探険隊+漢字教育士説明会」の活動が挙げられます。二〇一三年三月には静岡県三島市で「静岡漢字探険隊—漢字ジェスチャー大会」を開催、二日間で一〇〇名を超す参加者を得ました。六月には静岡市でも開催（静岡県教委・静岡市教委・静岡新聞社・静岡放送後援）、一二〇名の参加があり、大盛況となりました。同様の活動は金沢市（九月）、福島市・岡山市（一〇月）東京都千代田区・大阪府柏原

台湾での「白川文字学シンポジウム」

文化事業担当 久保 裕之

二〇一四年一〇月四日（土）・五日（日）、台湾の国立台北教育大学で「白川文字学と漢字教育」シンポジウムが開催され、当研究所と福井県教育庁が招かれた。

福井県教育庁生涯学習・文化財課の山元清隆課長と村上規代主任から福井県での白川文字学に関する政策と漢字教育について報告がなされ、岡崎良子同課指導主事による授業実演が行われた。当研究所からは久保裕之職員（白川研文化事業担当）から「白川文字学の学術背景と成果」と題して、白川静・本学名誉教授が生涯抱いていた「東洋」への憧れが研究の背景となっていること、当研究所は遺志を継いで学術・文化両面の活動を展開していることを報告した。

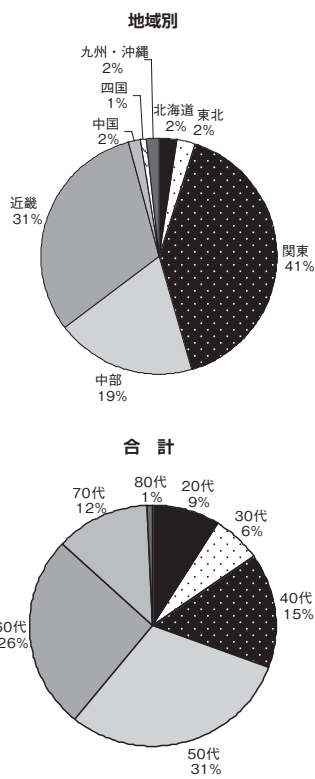


会議では漢字教育の相互交流と白川文字学に対する評価について率直な意見交換がなされ、「白川文字学による漢字教育は、正体字（繁体字）を使用している台湾での中国語教育にも有用だ」などの評価があつた。近年、台湾、中国、韓国では白川著作が相次いで翻訳出版されている。「東洋の復活」を願って研究を続けていた白川先生の想いを絶やさぬよう、活動を行っていく。

市（二月）でも開催されました。

そして漢字教育士の育成に大きな協力を頂いているのが公益財団法人日本漢字能力検定協会（漢検協会）です。漢検協会は漢検受検で培った漢字能力を社会に還元できる人材を育てようと「漢検漢字教育サポーター」制度を創設しました。サポーターの中から選抜された方々が本講座を受講されています。

漢字教育士は二〇一五年二月現在三〇〇名を突破し、その活動拠点は全国に拡がっています。内訳は名誉漢字教育士二名（故白川静博士と武田鉄矢氏）と特別認定者一七名、課程修了による認定者二九一名です。うち、課程修了による認定者の内訳は左記の表の通りです。



三〇〇名の漢字教育士が、学校の放課後教室、篆刻教室、生涯学習センター、公民館講座などでの講師として活躍したり、現役の学校教員や学習塾講師、日本語教師が自己のレベルアップに活かしられています。また各地で学習会を開催、自己研鑽に努められています。白川研も漢字教育士の活動を応援すべく情報の発信や、研修会の開催、学習会へのアドバイスなど、可能な限りの支援を行っています。

再度、中国での学外研究

副所長 芳村 弘道

学外研究の機会に恵まれ、二〇一三年九月二十二日から再び上海の復旦大学での研究生生活を始めた。前回の復旦大学滞在は二〇〇八年の三月末からの半年間で中文系に受け入れて戴いたが、今回は古籍整理研究所の御世話になり、受け入れ担当の陳正宏教授の御配慮をもって、復旦の中心的な学舎・研究室棟である光華樓の十七階に研究室まで用意して戴くという厚遇を忝なくした。宿舎は前回と同じ南苑といわれる外国人専家楼（外賓公寓と改称）で、部屋は前回の真下であった。

到着後に日本円を人民元に両替し、前回に口座を遺しておいた復旦の近くの銀行に入金した。ところが銀行カードが使用不可能になり困り果てた。窓口の職員の説明不足のため、原因がパスポートを更新したことによると分かるまで不安に陥れられた。再度、カード発行を申請して何とかなったが、この間の処理に陳教授を大変、煩わせてしまった。到着の翌日にして、外国生活に起こる困難事に遭遇し、を手助けして貰って切り抜けるという経験を先ず体験した。また現在、通帳を使わなくなったという中国の社会変化にも驚かされた。

変化といえば、大学周辺に多数あった割引き販売の書店が二軒だけになつていたのもその一つであった。書籍はネットで安く買うことが当たり前になり、書店が寂れたからである。ネット購入の盛行により、以前は見かけなかった快通（宅配便）の車（多くは電動車）を至るところで見かけた。前回は夕食後に書店に立ち寄るのが楽しみであったが、これが出来なくなった。代わりに毎週日曜日、文廟で開かれる古書市に足繁く通った。



上海文廟の古書市

三種が所蔵されており、三種を比較することで、草稿から定稿へと発展する過程が理解できるとともに、先学の推敲・訂補の跡をたどることもできた。以後、二〇一四年の四月末までに五〇種の刊写本を閲覧し、調査結果を「再訪復旦所見書録」として記録した。

十月十八・十九日に北京の故宫博物院開催の「故宫学10年學術研討會」に参加し、「談東伝日本的《乾隆四庫全書無板本》」

と題する発表を行った。この学会参加は上海到着後に決まったので、出国前に原稿を用意する時間がなかったが、二〇一三年三月発行の「立命館文学」に掲載された拙文の内容の一部が清の乾隆帝の四庫全書に関連し、この学会のテーマの「故宫学」とうまく合致するのが幸いした。急いで南京大学の金程宇兄にこの一部分を翻訳してもらい北京に赴いた。この頃も北京では霧霾（大気汚染）がしばしば発生していたので、大変に気がかりであった。十七日の午後一時の高速鉄道に乗車し上海を出発、五時間ほどで北京に到着する速さはすばらしかったが、夜でも分かる空気の悪さであった。ところが翌朝は快晴となり、学会会場の故宫会場は一般参観者が立ち入れない小宮殿の朱色の壁と琉璃瓦が紺碧の空に照り映える美しさであった。両側を高い壁に囲まれた人気のない通路から、その風景を眺めると、明清の昔に迷い込んだかのようなであった。第一日は基調講演と故宮見学、第二日に分科会形式で発表、午後は総括が行われた。拙文発表は、内閣文庫や京都の南丹市文化博物館や滋賀大学が所蔵する『乾隆四庫全書無板本』が日本独自の漢籍であるので、大いに関心と呼んだのはうれしいことであった。

上海に戻ってからは、再び復旦古籍部に通う毎日であったが、十一月中旬から十二月初めに上海図書館に向いた。訳注を進めている民国時代の文献学者の董康の資料と明末・清初の毛晋汲古閣影宋鈔本『江湖集』の調査が目的であった。後者は図書館の歴史文献中心の格別の配慮を受けて、汲古閣影宋鈔本の原本閲覧が許された。その調査結果などを含め、旧稿を増補修正し、二〇一四年三月の「江湖派研究」第三輯に論文を掲載することができた。前者の資料では、董康の友人の詩集の手稿本が調査でき、後人編刊の詩集には未収の作品を見いだせ、ありがたいことであった。十二月中旬に、京都からの先生方の浙江旅行に随行し、紹興と上虞の遺跡を訪ね、その後、一人杭州に残って浙江図書館に訪書し、孤本の『詳註百家唐詩彙集』など八種を閲覧した。

二〇一四年を迎えたが、中国の新年はやはり旧正月いわゆる春節であるので、一月一日だけが休日で、後は全く平常どおりであった。中旬に復旦古籍所の陳教授と学習院大学の大澤顯浩教授に同行して寧波の天一閣を訪れ、毛晋の影宋鈔本『集韻』などを閲覧し、すこぶる眼福を得た。それから数日後、春節前に古籍部の研究員の王亮君と院生の林振岳君に伴われて蘇州に出かけ、蘇州博物館の文徵明展参観と清代の蔵書家や王欣夫先生の旧居を訪ねた。残念ながら王欣夫先生の旧居は見つからなかったが、平江の黄丕烈旧居などを確認でき、また清代以来の古籍書店である文学山房の老主人、江澄波氏に会えたのは幸いであった。

二月の春節は過年（旧大晦日）の明るいうちから爆竹が鳴らされ、年が改まる前後二時間は鳴り止むことがなかった。二日に生粋の上海人の友人羅哲氏が豫園の正月風景を見に連れてくれることになった。その途中に、清の乾隆時代の進士で蔵書家の旧跡「書隠樓」を探訪した。それは京都の路地さながらの老上海の一街、天灯弄に今も遺っていた。運良く主人が帰宅したので、その好意で上海市の文物指定を受けた屋敷内が見学できた。敷地は文革時代には工場になったというほどの広さであるが、早くに書籍は失われ空しく蔵書楼が荒れた姿を止めるだけであった。そこから向かった豫園は、平日でさえ賑わう観光地であるので、予



書隠樓内の門

期したとおり恐ろしいほどの人出であった。

春節の約一週間は会社・商店が休みに入り、故郷に帰る人が多いため、街中は静まってよいが、都

市に留まる者は日常生活に不便が生じることがある。三日に書籍の校正刷りを日本にEMSで返送しようとする時に困った。復旦近くの郵便局は閉まっているので、朝から浦東に出かけたが、ここの郵便局では届くのに一週間以上かかるというわれ、締め切りに間に合わないの、しばし途方に暮れた。ありがたいことに友人の羅氏の助けを得、上海総局に行ってみると、簡単に受け付けてくれ、三日ほどで郵送できるとのことと安心した。ここは清末以来の伝統の郵便局で、建物や内装がすこぶる古雅な上に春節で人がとても少なく、懐古気分浸れて郵送のために転々とした疲れが癒された。総局を出て、日本人街があった虹口地区を散策し、旧本願寺など見学、さらに内山書店跡まで辿り着いた頃には既に日没を過ぎていた。

春節から約一か月、復旦の古籍部閲覧室は閉室となり、この間は拙論「修補」『乾隆四庫全書無板本』所収『江湖集』の鮑廷博校宋本識語について」とその中国訳の校正を南苑の一室で行うことが多かった。中国訳は羅氏に行って戴いた。羅氏は逐一内容を検討し、原稿の誤りまで訂正を加えて下さり、御蔭で「江湖詩派研究」掲載の拙論の校正によるしきを得た。また訳文をめぐって討論を行い、日本語と中国語の表現を互いに学ぶこともできた。この訳文「關於《乾隆四庫全書無板本》所收《江湖集》中鮑廷博校宋本識語的研考」は五月十四日に北京大学の国際漢学家研修基地で口頭報告した。

三月の中旬に中国文学専攻の旅行団を浙江省に迎え、余姚・紹興・杭州に同行し、四庫全書が收藏された西湖孤山の文瀾閣などを見学した。旅行中は三十度近くまで気温が上がる日もあり、天候に恵まれて中国古典文学・思想関連の多くの遺跡を訪ねた。ただし残念なことに日本よりも春の足取りが早く、孤山の梅は散り果てていた。眼を楽しませてくれたのは、西湖畔に芽吹いた柳の美しさであった。

桃を見逃すまいと三月末に再び西湖に遊んだが、今度は尚お早く、代

福井ライフ・アカデミー漢字文化講座 「白川文字学を学ぼう」の講演

客員研究員 津崎 幸博

本研究所は、二〇一三年度も福井県生涯学習センターの依頼を受け、おとなの漢字教養講座「白川文字学を学ぼう」に講師を派遣することになり、三回の講演を津崎幸博が担当した。

◆「人名から探る白川文字学」(二〇一三年十一月四日・福井市会場)

福井県の名字ベスト10に使用されている漢字から、田・中・本・吉・加・前・佐などをとりあげて、甲骨文・金文の資料に基づいて字の成り立ちを説明した。昭和以降の人気の名前の中から幸・美・愛・陽・悠・誠、受講者の名前から栄・正・良・喜などの字を選んで解説した。あわせて名字や名前に使われる漢字に制限があるのか、名前に使用する漢字の読み方の問題等についてもふれた。

なおこの講演の後、県立図書館で、十一月一日に立命館大学寄贈資料を入れて、リニューアル・オープンした白川文字学の室(へや)で特別展示されている白川静の直筆原稿、家族宛て手紙について、津崎史と幸博が解説する会が開かれた。四十名近い方が集まって来られ、白川の故郷福井への思いや仕事のことなどについて親しく談笑できたことは楽しい催しであった。

◆「神様とつながる漢字」(二〇一三年十一月十六日・福井市会場)

(二〇一三年十一月三十日・小浜市会場)

最初に、福井でよく使われている「白川文字学」の定義をした。「かみ」の意味の漢字として神・申・示・帝・祖、「まつる・いのる」の意の字として史・使・告・兄・祝・祭・祀をとりあげ、甲骨文・金文に基

わりに桜と海棠が満開であった。柳絮を見に四月九日にも西湖を訪れたが、これも今少し早く、全木、紛紛と漂う風景を期待したのが外れた。十五日に蘇州博物館内の文徵明手植えの藤を見に出かけた。花の盛りは過ぎてはいたが、一月の姿とは異なり、五百年の古木とは思えない妖艶な花房に覆われていた。藤を見た後は、黄丕烈旧宅を再訪。今は高級ホテルになっているが、人のいないのを幸いに中に進み入って、蔵書楼が見られた。百宋一廬の往時のままではないにしろ、昔を偲ぶに足る姿であった。四億元で一括購入されたことで大いに有名になった過雲楼は改修され公開されていると聞いたが、惜しいことに時間がなく、この日は見学を断念して上海に戻った。月末にまたも杭州に赴き、浙江省博物館での遼寧省博物館所蔵書画精品の展覧会を參觀した。

五月と六月は、孔子学院総部の援助を得て、北京大学国際漢学家研修基地の訪問教授となった。五月一日に北京着。三日に大倉文庫の開幕式に招待された。昨年の十二月十四日に東京の大倉集古館から搬入された漢籍が整理され、早くもこの日、全二冊の図録、全五冊の書志が刊行されて来式者に贈られ、その恩恵に浴した。北京大学の古籍部では、李木齋旧蔵本を閲覧し、研究している鮑廷博の『江湖後集』手校本の原本が見られたのは最も大きい収穫であった。六月には国家図書館の天津館に二週間通い、明鈔本『新刊古今歳時雜詠』をフィルム閲覧し、近年刊行の整理本『古今歳時雜詠』と校勘した。なお五月には湖北に旅行をし、武漢大学および宜昌の三峡大学で講演を行い、宜昌の楊守敬記念館、白楽天ゆかりの宜昌の三游洞、荊州博物館などを訪れた。また六月には教え子を秦皇島に訪ね、山海関などを見た後に、ともども瀋陽に旅行して遼寧省博物館や故宮などを見学し、四庫全書が收藏された北方四閣の一つ文瀾閣(瀋陽故宮内)を見ることができ長年の願いがかなった。

(二〇一四年六月二五日記)



講演の様子

づいてその字の形と意味との関係を見ていねいに説明した。『漢字なりたちブック』等の金子都美絵さんの影絵をプロジェクトで大きく写し出したり、U(さい)の模型らしき物(デパートで見つけたランチボックス)を使ったりして初心者の方にも理解していただけるように努めた。天上の神と地上の人のとの関係を説明するのには人・召・各・皆・阜・陟・降・際・限をとりあげ、社・里・野で「やしろ」についてもふれた。可・歌・無・舞・喜・楽を使って歌舞の起源が神事にあることを説明した。最後に白川静が好んだ字の「遊」をとりあげた。遊の字のものと「旂(ゆう)」は福井市の白川生誕地跡に建立されている碑に刻まれている字であり、もとは神が自由に行動するという意味の字であることを確認しておいた。三回の講演会には延べ九十五名が参加されたが、その感想文の一部を紹介しておく。

○ただ、漢字の成り立ちを説明するだけでなく、人の名前と関連づけて説明していただき、興味深かった。

○古代文字を踏まえて、白川文字学の中身を少し理解できた。

○神と関わる文字の成り立ちが具体的で、とてもよく理解できました。木の枝に結びつけた赤いランチボックスが、印象的でした。小学校で授業する時に使ってみようと思いました。

○白川文字学のおもしろさを教えてもらえた。

○白川文字学の基本がわかったような気がする。

○初心者にも分かりやすい講義内容でした。

附属校教員による

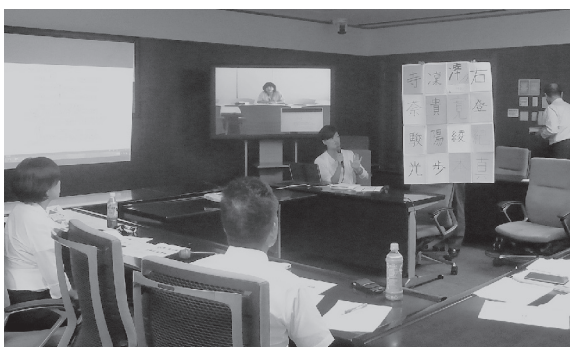
「白川式漢字学習法」開発ワーキングが発足

白川式漢字学習法開発WGリーダー

後藤 文男

二〇一四年四月から立命館学園の附属校教員による「白川式漢字学習法」開発ワーキングが発足しました。このワーキングは、白川先生の業績を初等・中等教育の現場に広く普及させるための教材開発・テキスト作りを主な任務としています。

白川文字学による漢字学習の特徴は二つです。ひとつは、漢字を「成り立ち」から学ぶこと。もうひとつは、漢字をひとつの家族として「つながり」で学ぶことです。漢字を成り立ちから学ぶことは、漢字を通して



「白川式漢字学習法」開発ワーキングの様子



WG研修～福井県立子ども歴史文化館白川静漢字ワールドにて

てそれを生み出した人々の思いや生き方を学ぶことであり、漢字をつながりて学ぶということは、漢字は一つ一つバラバラにあるのではなく、ちゃんとつながりあってその意味を膨らませたり発展させたりしていることを理解することでもあります。この二つの特徴を生かした漢字学習は、漢字を機械的に学習する従来型と比べ、漢字の本質を理解させる画期的な方法になると確信しています。

現在、各附属校から選出された委員とともに授業のための教材開発、テキスト作りに取り組んでいます。開発した教材での授業実践やテキストの有効性などを、各附属校の教員が検証・吟味し、より質の高い教材・テキストにして広く全国の小・中・高の現場に提供できるよう取り組みを進めたいと考えています。

附属校にとつて、白川文字学による漢字教育の実践には特別な意味があります。白川先生自身が生涯にわたって研究に励まれ、教壇に立たれたこの学園でこそ、その業績をどの学校よりも早く活かし、広げていく使命があるように感じています。

今、小学校では福井県が白川文字学による漢字指導の実践を先行させていますが、中等教育の段階では初めての試みとなります。このワーキングが立命館教育の新たな特色を全国に発信する大きな力となるよう附属校挙げて取り組んでいきたいと考えています。

「WG会議参加メンバー」

後藤文男 久保裕之（社会連携課） 田中博（一貫教育部）
大橋輝子・長谷川昭（立命館小学校） 村田友美（立命館中高）
西原文人（立命館宇治中高） 犬飼龍馬（立命館守山中高）
津藤純子（立命館慶祥中高）

成果を、当研究所発行の年刊誌『漢字学研究』にまとめています。二〇一四年七月に第二号が発行しました。当誌では会員や当研究所を含めた立命館大学の関係者のみならず、学外からも広く原稿を募集しています。原稿は字説八〇〇字以上、論考二四〇〇〇字程度、当研究所に印字原稿とデータファイルをお送り下さい。例年投稿締切は毎年二月末です。（編集委員による原稿の査読あるいは毎月の例会での口頭発表により採否を判断します。）

また、研究会例会の開催や『漢字学研究』の編集と並行して、甲骨・金文の著録書のデータベース化作業にも取り組んでいます。

当会の会員は上記の木村・末次・村上の三氏と幹事二名のほか、関西学院大学や立命館大学の関連分野の研究者が中心で、毎回の出席者は十名前後です。目下、大学院生や若手研究者などの若い会員が少ないのが悩みの種です。当会の活動に興味を持たれた方は、筆者のメールアドレス（satoshin@sun-inet.or.jp）までご連絡下さい。当会の開催案内をお送り致します。

〔附記〕二〇一四年八月一日に当会会長の木村秀海氏が逝去されました。謹んで御冥福をお祈り致します。



研究会の様子

漢字学研究会の紹介と活動報告

客員研究員

佐藤 信弥

漢字学研究会は佐藤武敏氏（大阪市立大学名誉教授）により殷周史研究会の名称で一九九五年に結成され、木村秀海（関西学院大学教授）・末次信行（千里金蘭大学教授）・村上幸造（大阪工業大学教授）の三氏を中心メンバーとして、「殷卜辞中所見先公先王考」をはじめとする王国維の諸論考や池田末利『殷虚書契後編釈文稿』・『穆天子伝』などの講読に取り組んできました。

二〇一二年四月より当研究所の支援を受け、漢字学研究会と名称を改め、客員研究員の馬越靖史氏と筆者（佐藤）を幹事として再出発することとなりました。現在は白川静『金文通釈』の続編を作ることを課題とし、毎月一回のペースで関西学院大学池内記念館にて、一九七〇年代末以後に発見・発表された新出金文の紹介と講読に取り組んでいます。

同様の活動は日本の他の研究機関でも行われているようですが、当会では講読を担当する会員が金文の識字に習熟すること、そして特に中国での新しい文字学の研究成果を吸収することを目指しています。中国では前世紀末以来の大量の戦国竹簡の発見を承け、それら竹簡などの戦国文字を利用して甲骨・金文の釈字や文章読解を行う手法が主流となっていますが、日本ではそのような甲骨・金文研究における戦国文字の重要性が今なお十分に認識されておらず、甲骨・金文研究と戦国竹簡研究とが分離して行われているという状況です。今後は当会での研究活動を通じて甲骨・金文研究と戦国竹簡研究との融合をはかっていきたいところです。

そしてその新出金文講読やその他文字学・出土文字資料に関する研究

「初期漢字研究会」の活動報告

客員研究員 高島 敏夫

以前から懸案としていた「初期漢字研究会」を二〇一四年度初めに立ち上げ、毎月一回土曜日に例会を実施しています。初期漢字という言葉は私の命名ですが、具体的には甲骨文や金文を指します。わざわざ新しい名前にしたのは、従来の古い文字観で研究するのではない、という意味をこめています。二年前に甲骨文の文字構造をすっきりした形で整理できた〔拙著〕甲骨文の誕生 原論として二〇一四年度中に刊行の予定〕のを踏まえて、研究会では西周前期の金文の読み直しに取り組み始めました。白川先生が築かれた仕事の土台の上に展開するものですから、白川文字学の真髓をよく理解するということが前提になっています。研究会には遠路はるばる毎月参加して下さる会員もあり、少数ながら非常に白熱した議論が展開されています。

西周前期の金文には殷周革命の経緯をうかがうことのできるものが多いのですが、殷周革命の実態をいまだ少し具体的に探るという問題意識に立つと、未解明の問題がいくつもあることに気がきます。その未解明の問題に取り組むというのが「初期漢字研究会」の一つのテーマです。殷周革命。専門外の読者が多い研究所便りにいきなり「殷周革命」という言葉を使いましたが、びんと来ない人が多いかも知れませんが、少々説明を加えておきます。

殷周革命とは、古代中国の殷代末期から西周時代前期にかけて起きた大きな歴史的転換をいう言葉です。一般には、殷王朝を西周王朝が滅ぼした出来事として知られています。この歴史的転換を「革命」と呼ぶのは、西洋風のレボリューションとは少々意味合いが異なります。「革命」

とは「命^{めい}」が「革^{あらた}まる」の意。この場合の「命」は天命の意で、「天下を治めるよう天から授けられた命^{めい}が革^{あらた}まる」という意味です。つまり殷王朝がそれまで天から授けられていた命を喪失したため、新たに西周王朝に授けられたという意味で使われているのです。この言葉は西周王朝側に立った言葉ですから、西周王朝が殷王朝を滅ぼしたことを正当化するイデオロギーということになります。この新しいイデオロギーの下に新しい時代が進行していく。その殷周革命の実態をより具体的に跡づけるために、西周前期の金文を読み直すという作業を始めたという次第です。この作業は白川先生が『金文通釈』その他進められた研究を踏まえるのですが、まだまだ未解明な問題が山積しています。

殷周革命をテーマとする狙いはもう一つあります。それは一〇年前に発見され近々公開される見通しの周公廟遺址出土甲骨の解説です。甲骨文といえは殷代のものと思われがちですが、殷代末期から西周初期にかけての甲骨文がかなり大量に出土したのです。そこには殷末周初の出来事が記されていて、これまでの歴史を大きく書き換えるような内容になっているとのことです。これぞまさしく殷周革命の実態を物語る最も重要な出土資料であるに違いありません。

これらの殷末周初の出土資料を読み直すにあたって新たに導入したのが新しい文字観です。新しい文字観と言いましても、特に新奇な文字観を言うものではなく、白川先生が打ち立てられた文字学の土台の上に立つて、言語と文字との関係を常に考えながら文字の示す概念を検討するという考え方です。このような文字観に立つことによって新たな言語現象に立ち会うことになりました。文字の歴史を跡づける新しい視点を得ることができたようにも思います。

研究会には意欲的な院生や学生諸君も混じって様々なテーマに挑んでいます。若い世代の積極的な参加を期待するとともに、皆様のご支援を賜わりますようお願いいたします。

立命館いばらき講座

客員研究員 高島 敏夫

本学が茨木キャンパスを開講するに先立って市民向きの講座を土曜日に実施していますが、当研究所では次の日程で「白川文字学講座」を実施しました。

【第一回】白川静の勉強法——書写しながら考える

（二〇一四年六月一四日 参加者八八名）

白川静の学者としての生涯を簡単に紹介した後、甲骨文の話に入ります。甲骨文の基本形を紹介した後、実際に甲骨文を模写しながら、文字の成り立ちを考えていただきます。書写しながら読むというのが白川静の勉強法です。

【第二回】甲骨文の世界に触れてみる——口偏の口字形は口ではない？

（二〇一四年六月二日 参加者八一名）

殷代の神々が出てくる甲骨文を実際に読んでいきます。自然神や祖先神のもたらす祟りや禍いを恐れた殷代の人々。現代人が忘れてしまった古代人の世界に、甲骨文を通して入ってみたいと思います。白川文字学で有名な「巳」字形についても触れます。

【第三回】白川文字学の視野の広さ——字源とその変遷を見据えて

（二〇一四年六月二八日 参加者七七名）

先生は最初は軍隊だった。奇抜な説を唱えるように見えますが、これが甲骨文での用法です。軍隊がどのような経過で先生になったのか、という関心で言葉の歴史をたどります。これすべて甲骨文と金文の緻密な研究から白川静が出した結論です。



講座の様子

【Topics】当研究所関連出版物

◆『白川静を読むときの辞典』（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所編、二〇一三年一〇月二五日、平凡社）

白川静の著作に接する読者のために、白川静の主張を理解するのに必要なことばを解説した辞典。

◆『字通』普及版（白川静、二〇一四年三月一九日、平凡社）

一九九六年一〇月刊行の「字通」を小型化し、普及版としたものである。

◆『人に教えたくなる！国語力を高める！創作漢字』（加地伸行監修、創作漢字コンテスト審査委員会編、二〇一四年三月四日、産経新聞出版）

産経新聞社と当研究所は二〇一〇年から、一般公募による「創作漢字コンテスト」を開催しており、過去4回の全入賞作品一三〇字を収録しております。

同年一月には福知山市動物園や福知山城（京都府福知山市）まで遠征し「漢字探検隊」を開催した。

東日本大震災復興支援活動「漢字で元気に」

「漢字で元気に」は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の復興支援活動の一つとして、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆の力を震災復興に向けられるように、さまざまな話題や知識を提供する活動を行なおうとする試みを始めた。二〇一一年十月に福島市と宮城県角田市とで活動を開始、二〇一二年度には岩手県大船渡市での活動も加わった。

二〇一三年度は一〇月五日に、福島市子どもの夢を育む施設・こむこむ館において「福島漢字探検隊―漢字あそび大会二〇一三」を開催した。今回も福島大学人間発達文化学類・澁澤尚研究室の協力を得て開催し、市民を無料招待した。漢字カルタやすごろくなど漢字をテーマにしたゲームや、「漢字クイズ」「画数ビンゴ大会」、古代文字で名前を書いた札をプレゼントするなどのイベントを行った。漢字かるたや双六などのゲームを楽しんだり、甲骨文や青銅器のレプリカ、白川名誉教授の写真パネルを見学したりするなど、会場では親子で楽しむ姿が見られた。「子供の視点・目線になって接してもらえた」（大人）「クイズが楽しかった」（小学生）など、世代を超えたコミュニケーションが行われた。会場には約三〇〇人の来場があった。翌六日には福島市民家園で「建物・道具と漢字」を開催した。県内からの古民家が集められている同園内を巡り、建物や道具と漢字との結びつきを学んだ。ここでの開催は震災前に予定されていたが、同園も一年ほど閉鎖されており、二年ぶりに実現の運びとなった。

立命館アカデミック企画 「白川静と漢字教育」

文化事業担当 久保 裕之

白川静先生が文化勲章を受章されてから一〇周年となるのを記念して、二〇一四年一〇月二五日に岡山シンフォニーホール（岡山市）で、「立命館アカデミック企画『白川静と漢字教育』」を開催した。立命館学園の卒業生が交流を深める「オール立命館校友大会2014 in 岡山」の一環で、校友や市民の併せて約一五〇〇人が聴講した。

第一部は「漢字教育のこれから」と題し、漢字教育の現場に近く造詣の深い方々に、白川先生が求めた「理想の漢字教育」を通して、系統性の発見や推理力の開発など、「漢字を教える」ことから「漢字で教える」ことへの転換を基調に意見を交換した。

津崎史氏（白川先生ご長女）は、父親の仕事ぶりを振り返り「二万もの甲骨文字を単語カードに書き写して分類し、一文字ずつ意味を読み解いていた」と紹介。「左・右・尋」などの例を引きながら、原初の形を留めている漢字の源を探り、意味や音と組み合わせた漢字の系統性に関する研究を確立したことを述べた。林雅則氏（福井県教育委員会教育長）は、白川先生の出身地である福井県では白川文字学の成果を基礎に漢字教材を開発し、約一〇年かけて県全体での漢字教育を実践している。「全国学力調査」でもトップクラスの福井県の教育の基礎に白川文字学が置かれており、初等教育での成果を中等教育以降に展開していることなどが紹介された。戸川英雄氏（朝日塾中等学校講師）は、漢文教育の中で漢字の果たしている役割と漢字で記された文章を読み、理解することについて、漢字一字一字がもつ情報を理解させることにより、生徒たちに先人の追体験をさせ、漢字に対する知識を深め、語彙を増やしていくこ

同月八日・九日には宮城県角田市と山元町を訪問した。山元町は震災と津波で甚大な被害を受けたところである。今回は二日間で小学校四校（山下第二小学校・東根小学校・横倉小学校・枝野小学校）を訪問し、「漢字クイズ大会」の形式で、漢字に関する様々な分野の学習を行った。

同月十二日・十三日には、岩手県大船渡市を訪れた。立命館大学が災害復興に向けた連携協力に関する協定を締結しており、立命館学園の教職員・学生生徒児童らが様々な支援活動を継続的に行っている。今回も、ゲームやクイズを通して楽しく漢字と触れ合うことを目的に「大船渡漢字探検隊―漢字あそび大会」と題して、福島と同様のイベントを開催した。今回は、災害復興支援室が派遣した後方支援スタッフの学生一〇名が運営サポートとして参加した。会場では、各コーナーに学生がサポートに入り、参加者と交流した。「去年参加して楽しかったから今年も来た」（小学生）「クイズ大会であるほどと思えることがたくさんあった」「五歳や三歳の子も楽しかったようです。まだ早いかなと思うのは親だけでした。」（大人）などの感想があった。会場には二日間で約一〇〇人の方が訪れ、地元紙の『東海新報』に報道された。

今年も秋に同様の取組を引き続き行う計画を進めている。「大学だからできる復興支援活動」の一つとして、訪問地の協力も得て進めていく。



つくば漢字探検隊「歴史と漢字」



静岡漢字探検隊「漢字ジェスチャー大会」



大船渡漢字探検隊「漢字あそび大会」

とが、正しい日本語の使い方に繋がるという考えを述べた。木山博雅氏（山陽新聞社取締役編集主幹）は、子どもしんぶん『さん太タイムズ』で、白川先生の研究を基に漢字の成り立ちを分かりやすく伝えていることなどを紹介した。進行役の白川研・加地伸行副研究所長は「漢字に体系があることを示し、効率良く学べるようになった」と白川先生の功績をまとめた。



名誉漢字教育士 武田鉄矢氏



杉橋隆夫所長による挨拶



津崎史氏



加地伸行副所長



戸川英雄氏



木山博雅氏



林雅則氏

字学の魅力を述べた。加地副所長は武田氏の言葉を受けて「武田さんの作る歌詞を読むと、言葉に対して非常に細やかな選択をしていると感じます。言葉への追究心が元々あるところへ、白川文字学がうまくドッキングしたのではないのでしょうか。」と述べると、武田氏は「白川文字学は面白くて仕方がないんです。」と「哀」や「懷」の例を引いて解説した。また白川先生の『遊字論』について「(「遊」の字の) 解釈の雄大さがとても好きです。」と述べた。武田氏の話を受けて加地副所長が白川先生の字源研究を通して中国や日本の古代の姿を解き明かすことが最終目的であり、字形と意味の向こうに、東洋の古代人の生活や考え方が見えてくることや、文字と文字との体系の繋がりが見えてくること等に触れると、話は「浮」の字源にも及び、武田氏は「『浮』の字になぜ『子』が含まれているのか不思議に思っていたんですが、これを『古代では川に子どもを投げ込んで、生命力を持っているかを試す儀式を行っていたのではないか』と白川文字学は鮮やかに問いてくれました。」と述べ、その卑近な例として会場地元・岡山の昔話「桃太郎」のことを挙げ、「川に浮かび流れてきた桃太郎は、鬼を退治するほどの力を持っていた。『浮』と『流』という漢字が桃太郎の話にぴったりに重なり、深々と納得することができるとです。」と論じた。

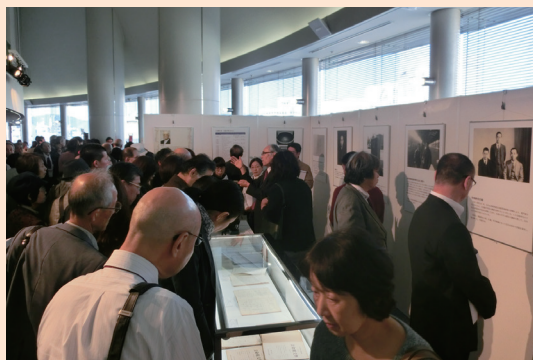
企画は終始打ち解けた雰囲気で行進し、特に第二部では武田氏の博識ぶりや白川先生への情熱と尊敬の念が観衆にもひしひしと伝わるものであった。ホール外では白川先生の足跡や人となり、東アジアへの研究成果の拡がり等を紹介する展示コーナーと白川文字学関連書籍の特設販売コーナーが設けられ、こちらにも多数の聴衆が訪れていた。また翌二六日には山陽新聞社の協力を得て「岡山漢字探検隊―漢字ジェスチャー大会」を同社本社内の「さん太ホール」で開催、県内外から一三〇人の参加があった。



『浮』の漢字を説明する武田鉄矢氏



多数の聴衆が詰め掛けた会場



白川静先生関連展示コーナー盛況の様子



第一部「漢字教育のこれから」